

研究集会

# SNS と文化創造

報告

2020年2月15日（土）18:30-20:30

ウインクあいち 907 会議室

主催「脱メディア時代のポップ・カルチャー美学に関する基盤研究」

（研究代表者：室井尚横浜国立大学教授）

（科学研究費補助金基盤研究(A) 19H00517）

## 研究集会報告「SNS と文化創造」

報告者：秋庭史典（名古屋大学）

### [基本情報]

日時：2020年2月15日（土）18:30-20:30

会場：ウィンクあいち（名古屋市中村区）907 会議室

講演者：Haoshin Chang、Chun-Yuan Chen

主催：「脱マスメディア時代のポップ・カルチャー美学に関する基盤研究」

（科学研究費補助金基盤研究(A) 19H00517、研究代表者：室井尚横浜国立大学教授）

### [趣旨]

名古屋での研究集会は、科学研究費補助金の研究題目のなかにある「脱マスメディア時代」を直接受け、脱マスメディア時代をもたらした最大の要因のひとつである「SNS（ソーシャルネットワークサービス）が、いかにして新しい文化を創造しているか」をテーマとするものであった。

SNS がわたしたちの生活を大きく変えたことは、ここで指摘するまでもないことであり、それについての研究は、それこそ枚挙にいとまがないほど存在している。しかしながら、それが文化をどのように変えているのか、ほんとうに新しい文化を創造しているのか、については、それほど多くの研究があるようには思われない。

そこで、このテーマについて、台北から、SNS を通してバイオアートのコミュニティを拡大してきたアーティストと、デザイナーまたマネジャーとして SNS の活動を注視している研究者を一人ずつ招待し、日本との比較も交えつつ、講演していただくことを企画した。

SNS とは何かについては、それぞれの講演者についての報告でも述べるので、ここでは措くとして（一般的な SNS の定義、ソーシャルメディアとの違いなどについては、数ある先行記事を参照していただきたい）、なぜ台北から講演者を招待したのかについてだけ、ひとこと説明を加えておきたい。それは、ごく単純な理由であるが、もっとも近い隣国のひとつである台湾における SNS 利用との比較を通して、われわれがあまり意識することのない日本における SNS 利用の特殊性を振り返ることができるからである。講演でも何度か触れられたように、台湾と日本における SNS 利用には、顕著な違いがある。

次になぜバイオアートを主たる活動の場とするアーティストを招待したのか、であるが、近年日本でも耳にすることの増えたバイオアートという新しい芸術文化の領域が始

まったのは、(諸説あるだろうが) おおよそ西暦 2000 年前後であると考えられる (cf. Kac, E. (ed.), *Signs of Life: Bio Art and Beyond*, The MIT Press, 2007)。SNS が登場してきたのが 2000 年代の半ばであり、その点で、バイオアートの活動においては、SNS の影響を見て取りやすいのではないかと考えた。特に、欧米や日本に触発された地域においてバイオアートがスタートした頃には、すでに SNS が世界に広まっていた。また、バイオアートの場合、その始まりから現在まで、まだあまり時間が経過しておらず、その変化を見渡しやすいという利点もある。講演者の Haoshin Chang 氏は、台湾におけるバイオアートのオンライン (+オフライン) コミュニティにその立ち上げから関わってきた人物で、現在は、MIT が主催する、SNS を中心とした、物理的な拠点を持たない、バイオアーティストの世界的コミュニティである Community Bio Summit のフェローをつとめている。この点で、講演者として適任と考えた。

もう一人の講演者に、デザイナーでもありマネジャーでもある Chun-Yuan Chen 氏を選んだのは、次の理由からである。アーティストである Chang 氏が自身の表現活動の手段としていわば内側から SNS に関心を有しているのに対し、インダストリアル・デザインを学び、インタラクティブデザイナーを経て、ヨーロッパ (台北デザインセンター・デュッセルドルフ) で台北デザインを各国に紹介するストラテジー・マネジャーとして活躍してきた Chen 氏は、メディアというものをより俯瞰的に見ており、Chang 氏とは異なる視点から SNS を論じていただけると考えたからである。

以下、講演の内容をまとめて紹介する (文責: 秋庭)。

## [講演 1]

### オンラインで文化を共創すること-台湾のバイオアートコミュニティの場合

#### Haoshin Chang

バイオアーティストでオーガナイザーの Chang 氏の講演は、大きく二部に分かれていた。第一部は、自己紹介ののち、講演に含まれるキーワードについての次のような問いとともに始まった。

- ・コミュニティとは何か?
- ・SNS とは何か?
- ・カルチャーとは? ポップ・カルチャーとは?
- ・バイオアートとは?

なかでも氏が力点を置いて説明したのが、「コミュニティ」というキーワードである。

それは、台湾におけるバイオアートが、氏を含む 4 人の若者が始めたオンライン上の「コミュニティ」(Bioart.tw) に端を発することからも、おそらく重要なキーワードなのであろう。Bioart.tw の公式ウェブサイトには、次のように述べられている。

「Bioart.tw は、バイオアートのコミュニティであり、台湾におけるバイオアートとサイエンス+アートのフィールドを刺激することにその照準を合わせている。われわれはまた、台湾と、アジアならびにおそらくは世界の他の地域でサイエンス+アートの実践を行なっている他者たちとの対話を進めようとする。このコミュニティが促進する主たる活動には、インターネット上で情報をシェアすることとならんで、以下のような物理的ミーティングも含まれる。たとえば、DIY バイオのワークショップ、アート・プロジェクト、ラウンドテーブル、想像の生物ならびに科学哲学と文化哲学に関する創造的ディスカッション、ブッククラブ、異なるバイオアート空間のあいだの国際的なスカイプ・ミーティング、トーク、科学者とアーティストのための迅速な会合設定、などである。このコミュニティは、生物学とアートのインタラクションのためのプラットフォームとして機能し、そこから、学際的分野で活動する人々を結集させる。〔以下略〕」  
([http://bioart.tw/?page\\_id=223](http://bioart.tw/?page_id=223))

そこで Chang 氏は、自身の考えるコミュニティについて、生物学、社会学等におけるコミュニティの概念を参照しつつ、コミュニティとは、あることがらに対する共通の関心をもつ人々により形成されるエスニックグループであるとともに、メディアによって形成される想像の共同体でもある、といった見方を示した。SNS については、氏は(ツイッターではなく)主としてフェイスブックを念頭においており、その特性を考えるにあたって、ハワード・ラインゴールドの『ヴァーチャル・コミュニティ』を参照していた。それらについての考察をまとめて、

#### Culture / Community is the key for creating Community / Culture

と結論づけた。これは、コミュニティを創造するのは文化だが、文化を創造するのはコミュニティであり、両者は不離である、といったことを意味していると思われる。台湾のバイオアートについて言えば、「バイオ関連の話題への共通の関心」という文化と、「オンライン上の SNS」ならびに「オフラインの物理的空間」に存在するコミュニティとが、互いを創造した、ということになるようである。(ここに、より社会的政治的なメインストリームの問題への態度交換、意見交換というもうひとつの文化がのちに加

わっていくことになる。) ちなみに、氏は、自身のポップ・カルチャーについての捉え方を、次の表で示した。通常あまりポップ・カルチャーとはみなされない、メインストリームで流行りの「ニュース・トピックス」が、ポップ・カルチャーに含まれていることに注意したい。

	<b>Mainstream</b>	<b>Not Mainstream</b>
<b>Trendy</b>	News Topics	Cult Sub-culture
<b>Not trendy</b>	Everyday Life (Henri Lefebvre, Michael Gardiner)	Endangered Culture

第二部で Chang 氏は、こうしたコミュニティと文化の関係を前提として、台湾におけるバイオカルチャーのコミュニティである「Bioart.tw」が、「アーキペラゴ (群島)」と呼ばれるより大きな SNS 上のコミュニティへと発展していく経緯について、「プレ・コミュニティ」「コミュニティ」「ポスト・コミュニティ」の三つの時期に分けて説明した。

プレ・コミュニティ期とは、4 人の関心や趣味を同じくするメンバーが、台湾や中華地域での情報不足を補うために集まり、同じような関心を持つ人に向けて、その人たちが将来のメンバーになるよう、トークやワークショップなどを行っていた時期のことを指す。その際、政治や公的な問題は中心ではなく、メンバー間のチャットで非公式に話す程度であったが、それによりグループの絆は強まっていった。Chang 氏は、この時期の活動として、「SPACE COLONIZATION」と題された 2012 年の展覧会、人の手形の痕跡からバクテリアが生じてくることで人とバクテリアの共生を意識させる作品などを紹介した。また、台湾の市街地に物理的拠点も持つようになったこと、そこでさまざまなイベントを行ったことも紹介した。

Chang 氏は、このプレ・コミュニティ期のあいだに起こり、プレ・コミュニティ期からコミュニティ期への移行を促した出来事として、SNS を通じて知られたさまざまな社会や政治の問題があったことを述べた。たとえば、福島第一原子力発電所の事故への台湾における大きな反応や、ウォール街の占拠への反応など、である。氏はそれを、すでに述べたように、SNS を通じて知られた一種のポップ・カルチャーと位置づけているようである。(上掲の表を参照。) また実際、こうした出来事をポップ・カルチャー

として表現した作品もあったという。

次がコミュニティ期である。コミュニティ期とは、バイオに関連するトピックについての共通の関心から、それに加えてメインストリームでの諸問題、上でポップ・カルチャーの一角に位置づけられているような問題について、態度や意見を交換することに、重点が移っていった時期である。この時期は、バイオアート以外のさまざまな関心を有するコミュニティメンバーが増えている。その理由には、アジア諸国や欧米での政治的情勢の不安定化に加え、国内の政治情勢の不安定化があげられたが、それだけでなく、「シビック・テクノロジー-civic technology」（人々と政府のあいだの関係を、コミュニケーション・意思決定・サービスの配分・政治的プロセスに役立つソフトウェアを用いて強化していこうとする考え方）やジェンダー・ムーブメントの影響があるとした。特にシビック・テクノロジーについて、Chang氏は、台湾に拠点を置く「多極的シビック・テック・コミュニティ」である「g0v」について触れていた。

また Chang氏は、この時期に、コミュニティ「Bioart.tw」のうえに、「アーキペラゴ（群島）」と呼ばれるもうひとつのコミュニティが誕生していること、そうしたコミュニティのなかで、アルス・エレクトロニカ受賞者を招いたイベントやワークショップなどを行っていたことを述べた。

最後がポスト・コミュニティ期である。Chang氏によれば、これは、メンバー間の修復不可能な衝突、転居や結婚や出産などによる生活の変化、さらにはバイオアートの確立と制度化（大学にバイオアートの課程ができたり、国からの助成が得られるようになったりしたこと）などによって、コミュニティメンバーの全員が参加して行うコミュニティ・ベースの大きなイベントがあまりできなくなってきた時期、つまり現在を指している。Chang氏は他にも、個々のメンバーがコミュニティ外部の人間や特定のオーディエンスと連携して行う活動が増えてきたこと（日本でのこうした講演もそのひとつにあたりと考えられる）、コミュニティ内部のサブグループによるスピンオフ企画が増えてきたこと、コミュニティ構築のための戦略として、オンラインだけでコンテンツを管理するようになったこと（Community Bio Summitなどがそれにあたりと考えられる）、などを、変化の理由としてあげていた。Chang氏自身も、Bio Summitでの活動を行なっているが、他のメンバーも、バイオ食品事業に忙しい者や、プロフェッショナルなバイオアーティストになった者などがあることが紹介された。今後それをどのように乗り越えていくのかが課題であると述べて、講演は終了した。

Chang氏の講演については、質疑応答でいくつか議論がなされた。それについては後述する。

## [講演 2]

台湾における SNS 利用、ならびに日本との比較-デザイナーの視点から

Chun-Yuan Chen

Chen 氏の講演は、五つのパートから成っており、初めは自己紹介、第二部はコミュニケーションの進化について、第三部は台湾と日本の SNS 利用の比較、第四部は、台湾ポップ・カルチャーにおける SNS の活用について、第五部は、近い将来の SNS の利用についての予測、であった。

第二部の、コミュニケーションの進化についてのパートから振り返る。そこで氏は、インフォグラフィックを用いながら、コミュニケーションの進化を圧縮して、次のように述べた。すなわち、古代における洞窟絵画や狼煙から始まり、アルファベットなど文字の発明を経て、電信、電話と進み、1990 年代には、コンピューターやダイヤルアップネットワークが一般化し、1992 年には SNS が登城し、その後、スマートフォンやタブレットの時代となった、と。

そのなかでも、最も重要なものが、トム・アンダーソンとマーク・ザッカーバーグによって始められたソーシャルメディアである My Space と Facebook である。今後は、ワイアレス・テクノロジーの時代に入っていくだろう。

ここで Chen 氏は、聴衆にひとつの質問を投げかけた。

「現代のコミュニケーションツールに、最も似ている古代の装置は何か？」

がそれである。会場からいくつかの答えが提案されたのち、氏が明かした答えは、古代の「笏 (ふ hu)」であった。(日本では、笏 (しゃく) と呼ばれているものである。) それは、古代では、皇帝に面会するときのコミュニケーションツールとして用いられていた。なぜなら、当時、官僚といえども、皇帝と直接目を合わせることは禁じられていたからである。またこの笏は、それを持つ人の威厳や権威を象徴するものでもあった。さらにこの笏は、その裏にメモを貼り付け、備忘のためにも使われていたのである。

これが現代のコミュニケーションツールで言えば、モバイルフォン (携帯電話、スマートフォン) に相当するのである。たしかに氏の言うように、われわれはスマホをメモ代わりに使うし、最新のスマホを手にした人を見ると「お、すごい」と思うこともある。そして何よりも、通勤電車のなかや食事の最中、他人と目を合わせるのを避けるかのように、スマホに見入っている。テクノロジーが進歩しても人間のやることは同じ、ということなのだろうか。

第三部では、台湾と日本の SNS 利用の違いが述べられた。Chen 氏が紹介したある調査によれば、台湾では SNS を利用している人が 80%であるに対し、日本では 56%、また台湾では、フェイスブックの月間利用数が 80%であるに対し、日本では 30%、YouTube やインスタグラムについても、同様の傾向がある、ということが報告された。こうした調査の信頼性については措くとして、一般に、そうした傾向が認められるということかと思われる。氏はまた、日本のユーザーが匿名で顔写真の代わりにペットなどを使うのに対して、台湾のユーザーは、実名で顔写真を使うといった違いがある、台湾のユーザーが日常生活をすべて披露するのに対し、日本のユーザーは大きなイベントの告知に使うといった違いも指摘したが、これについては、後述するように、質疑で多少議論になった。

第四部では、台湾のポップ・カルチャーにおける SNS 利用についての報告がなされた。著名な俳優が、利用する SNS の違いにより掲載する写真の特徴を変化させている例、著名な姉妹が互いに SNS 利用の仕方を変えている例、トラブルの多さから SNS 利用をやめてしまった著名人の例などが紹介された。またテレビドラマが SNS を活用している例もいくつか紹介された。脚本家がある事件を題材にしたドラマの脚本を執筆する際に、五ヶ月のあいだ SNS でこの事件に関するキーワードをつぶさに調べた例や、別のドラマが何種類のも公式 SNS（ドラマのなかの女性に関するトピックに興味のある視聴者のための SNS、ドラマのなかの歴史や政治に関心のあるグループのための SNS、テレビドラマという文化についてディープな議論を行うグループのための SNS など）を活用している例（SNS Curating）なども紹介された。さらに、YouTuber に代表される「インターネット・セレブリティ」についても触れられた。このパートの最後では、そうしたインターネット・セレブリティとアイドルとのコラボレーション、政治家とのコラボレーション（台湾の政治家と日本の YouTuber とのコラボレーション）、ファッションブランドとのコラボレーションなどの例が紹介された。

最後の第五部では、近い将来の SNS 利用の可能性について、AR/VR、アバター、ロボットという三つの観点から展望された。AR や VR と SNS を組み合わせて、同じ場所にいない人と食事を共にする例や、ロボットカフェ、アバターの利用といった、われわれにも馴染み深い将来像が紹介されたのち、これからも SNS はテクノロジーの進歩や我々の想像力によって、その姿を変えられていくだろう、ということばとともに、講演は結ばれた。

## [質疑応答]

講演終了後、研究グループから講演者二人に対し、質問ならびにコメントを行った。それについてもあわせて簡単に報告する。

最初の質問は、研究代表者である横浜国立大学の室井教授からである。室井教授は、まずこの研究グループと研究会の趣旨についてまとめたうえで（これはほんらい研究会冒頭に行くべきであったものを、あらためてまとめていただいたものである。進行上の不手際をお詫びする）、次の質問を行った。（講演者の回答については、意識と考えていただきたい。）

○室井 まず Chang 先生に質問で、なぜバイオアートなのか？ バイオアートに何か人を結びつける力があるのか、それとも、たまたまバイオアートのコミュニティのメンバーが人を結びつける力をもっていたのか。さらに、SNS はその場合にどういう働きをしたのか、それについて追加で説明があれば、お願いしたい。

次に Chen 先生にお聞きしたいのは、台湾でなぜそんなにフェイスブックに人気があるのか、ということ。日本で若い人はほとんどフェイスブックを使わない。ツイッターを使っている人の方が多い。それはツイッターが匿名のコミュニケーションツールであることが大きい。匿名、あるいは LINE のようにクローズドなコミュニケーションの方を好む。それはおそらく大きな不安があり、自分のプライバシーを人に晒すことについての恐怖感・不安感が非常に強いからだと思われる。YouTuber についても同じで、もちろん日本にもスターはいるが、自分の顔を晒すことについては躊躇がある。また YouTube のなかで政治的アジテーションを行う人もあり、そうした人の言葉に大きく影響される人も増えている。もし台湾でも、フェイスブックに関してプライバシーなどで大きな問題が起こったら、いまのようにみんなが個人情報を出していくことが続けられるのかどうか、それについてお聞きしたい。

○Chang ご質問は、なぜわれわれがバイオアートをやっていて、なぜそれをさらに SNS を通じてやっているのか、ということかと思いますが、まずわれわれは4名から出発しており、もっと多くの人と知り合うには、ソーシャルネットワークが手っ取り早く便利だったということがあります。なので、グループ結成後すぐにフェイスブックにサイトを開設しました。別にバイオアートじゃなくても、どんなアートでもそれらを使うでしょう。以前ならメールでやりとりしていたことです。われわれはまた LINE グループも使っています。他のアクティヴィストたちのなかには、（インスタント・メッセージ・アプリで香港の大規模デモの際にも活躍した）テレグラムを使っている人たちもいます。物理的（フィジカル）なレイヤーとインターネットレイヤー（主としてフェイ

スブックですが) の二つのレイヤーを使っているのです。もちろん、バイオアートである必要はなかったでしょう。ただ、ソーシャルネットワークがわれわれと他の世界を結ぶもっとも便利な道具であったことは確かです。また、台湾は国家安全保障上の緊張状態にあるので、オンラインで笑顔を振りまいているだけでなく、常にそうしたことに警戒している人もいます。

○Chen なぜフェイスブックがそれほど台湾で人気なのか、ということですが、正確なお答えになるかどうかわかりませんが、第一に、フェイスブックが最も早く台湾に紹介された SNS のひとつであったということがあると思います。なので、ツイッターよりもフェイスブックの利用が進んだということです。第二に、台湾と日本におけるパーソナリティの違いがあると思います。わたしの知る限り日本人はやはり謙虚です。これに対し台湾では、単純に人々のなかで有名になりたい、人の注意を引きたいという人がいて、そうした人がフェイスブックを利用していると思います。もうひとつ考えられる理由ですが、台湾の 80% のひとがフェイスブックを使用しているといっても、そのうちの多くは不活発であり、長い間投稿しないという人も多いということです。単に他人の消息を確認しているだけの人も多い。ですので、大半の人がフェイスブックを使っているけれども、実際には不活性なのだ、と言えるでしょう。

次の質問は、京都精華大学の佐藤教授から。

○佐藤 Chang さんに質問で、バイオアート以外にも、そういうかたちでコミュニティをつくっているアーティストたちがいるのか。ほかのバイオアート、あるいはメディアアート、ポストインターネットアートといったジャンルのアーティストたち、もちろんペインターなどでもあるかもしれない、そういう人たちで、Chang さんと同じようなかたちで SNS を使っているアーティストたちは多くいるのか。もしそうであれば、まさに、講演のなかで言われた「アーキペラゴ (群島)」的な状態であり、面白いと考えたのだが。

○Chang もちろん、メディアアーティストだけでなく、多くのアーティストが自分のプロモーションにソーシャルメディアのネットワークを使っています。統合してグループを結成する人もいます。なかには、単に自分のしていることをただ投稿しているだけのひともいます。すべてのアーティストグループを知っているわけではありませんが。群島のような状況になっているかもしれません。

○佐藤 それは日本でも同じです。日本の若いアーティストたちは、自身の展覧会をプロモートしたり、イベントを告知したりするのに、フェイスブックのイベントページを使っている。けれども、Chang さんのやっていることは、コミュニティの構築である。

ウェブサイトの名前である「Bioart.tw」がまさにそれを示しているように。そのような意味での活動をしている他のアーティストがいるのか、ということをお聞きしたい。

○Chang もちろんいるでしょうが、そういう意味でわたしが知っているのは二人の女性です。が、彼女たちは、アーティストというよりも、カルチュラル・オーガナイザーあるいはキュレーターといった人です。彼女たちはさまざまな物事を創り出しているし、展覧会もときにやっています。ただ、彼女たちが自分たちのやっていることを「コミュニティ」と考えているかどうかについては、はっきりとはわかりません。そうではないように思います。そういうことで言えば、講演のなかで紹介した「g0v」が、コミュニティを形成しようとしていると思います。われわれは、他のアーティストグループとちよつと違うのかもしれない。

最後は京都大学の吉岡教授から。

○吉岡 一般的な印象として、台湾だけでなく、韓国や中国でもそうなのだが、インターネットや SNS でのコミュニケーションに対する態度が、ポジティブだと感じる。日本の場合は、控えめだというわけではなく、室井先生も指摘されたように、怖がっている人が多い。テレビやマスメディアのなかで、インターネットのなかのネガティブな出来事、犯罪とか子供のいじめとか、が強調されることが多い。そういう状況はやはり違うな、と思う。台湾について、象徴的だと思うけれども、新しいデジタル・ミニスター、情報大臣（オードリー・タン）がいる。彼女が就任してから、インターネットに関する政策で変わった点はあるのだろうか。

○Chen わたしたちが SNS に対してポジティブだと感じられる理由のひとつは、私が紹介したインターネット・セレブリティたちが、インターネット上でおもしろおかしいことをやっているからかもしれません。もっぱらエンターテインメントのために使っている。大統領でさえ、そこに参加しています。それがそのような印象を与えるのだと思います。

○Chang 日本にはいまでもみんなと同じでありたいという願望があるのかな、と思います。他人とはあまり違ってはいけないという。そういう社会的同調圧力みたいなものが、いまだに日本にはあるような気がします。台湾でも同じです。他人を傷つけてはいけないとか。ただ、たとえば前回の選挙の結果は、台湾の人たちが自分自身でいることを望んだ結果だと思います。もちろん台湾でも「公的な場所で晒し者にする行為」はあります。仲間からの圧力も、特に学校ではあります。SNS での圧力もあります。けれどもそうしたことが白昼のもとに曝されたときには、議論が巻き起こり、公的なシーンとでもいうものができあがり、そうしたことに注意を払うシステムができていきます。そ

うしたシステムは公平さをもたらしたり、事態を軟化させたりします。つまり、実際にはネガティブでもポジティブでもないのです。けれども、いま人を惹きつけるには、ポジティブに振る舞う方が得策で、多くの素人は、そのために **YouTuber** などの強い影響下に置かれることになっているのです。

### [報告者のコメント]

報告は以上であるが、最後に簡単なコメントを付け加える。

質疑応答のなかですでに室井教授によって指摘されていることと関連するが、報告者にとっての関心のひとつは、**SNS** はバイオアートにとってどういう役割を果たしたのか、言い換えれば、**SNS** を利用したことによってバイオアートそのものが変化したのか、さらにいえば、**SNS**+人+作品+活動の総体をバイオアートと捉えるような視点があるのかどうか、ということであった。**SNS** が、すでにあるバイオアートなるものを単に広めるだけのツール、あるいは、バイオアートの物理的拠点やそこで開催されているイベントにより多くの人を集めるための単なるツールであるというのであれば、他の多くのイベントによる **SNS** 利用と何も変わらない。そこで新しい文化が生まれたとは言うことは難しいだろう（移植されたとは言えるかもしれない）。この点について **Chang** 氏の講演から明確な答えを得ることはできなかった。いくつか紹介されたバイオアート作品には、日本や他の地域とも異なる独自性があるように感じられたので、講演や議論の時間にもう少し余裕があれば、と反省している。

報告者のもうひとつの関心は、**SNS** を通じて、フィルターバブルやエコーチェンバー現象のように、「見たいものだけを見る」といった共通の関心のみによって成立する共感のコミュニティではなく、多様な関心をもち、意見の異なるひとたちが集うハイブリッドなコミュニティが創造されていたのかどうか、である。これは佐藤教授の質問と関連しているが、これについては、やはり（ハイブリッドではなく）共感のコミュニティであることが明らかになったように思う。つまり、「**Bioart.tw**」から「アーキペラゴ（群島）」への展開は、よりハイブリッドなコミュニティへの展開というよりも、共通のバイオカルチャーへの関心から出発したコミュニティが、共通の社会的政治的関心に基づくコミュニティへと移行したということであり、両者はハイブリッドではなく、異なるコミュニティが違うレイヤー上に存在していた、と理解すべきであろう（**Chang** 氏もそのように述べていた）。それを平面上に表現すると若干の重なり部分があるように見えるだけである。それでは、いくつかの島が違うレイヤーにあるのを真上から見ると群島に見えるというだけのことで、実際には群島ではないことになる。そもそも、**Chang**

氏によるコミュニティの定義が、共通の関心をもつ者の集まり、ということなので、それは仕方がないことかもしれない（もちろん、Chang 氏は現在までのさまざまなコミュニティ論、たとえばアガンベンのそれなどは当然知っている）。第一の点とも関連するが、やはり SNS は、共感に基づくコミュニティの主張を宣伝したり、それにより新しい仲間を獲得したりするためのツールと位置づけられているのだろう。もちろん、これらの疑問は、講演が興味深かったからこそ生じたものである。そのことは強調しておきたい。

Chen 氏の講演では、台湾と日本の SNS 利用の違いだけでなく、本研究会のもうひとつのテーマであるポップ・カルチャーについても、さまざまに紹介された。吉岡教授の質問でも取り上げられたように、デジタル・ミニスター（デジタル担当政務委員）にトランスジェンダーで 30 代の天才プログラマー（というようなことばかりに注目するのもよくないと思うが、もともとは Chang 氏が講演で紹介していたシビック・テックのコミュニティ「g0v」にも関係していた）を選ぶ国のポップ・カルチャーについても、もう少し講演ならびに討論の時間に余裕をもって、より深いお話しをうかがう必要があった、と反省している。

#### [謝辞]

最後になりましたが、ご来場者のみなさま、同時通訳関係のみなさま、そして遠方よりお越しいただいた講演者の方々に深く感謝申し上げます。

本研究会は、JSPS 科研費 19H00517 の支援を受けています。

### [講演者略歴]

**Haoshin Chang** : アーティスト、リサーチャー、エデュケーターとして、アート・サイエンス・テクノロジー (AST) の領域を、歴史的・社会文化的射程から横断している。国立台湾大学で生物学を学んだのち、国立台北芸術大学で修士号を取得。自身の作品とリサーチを、ISEA (電子芸術国際会議)、愛知芸術文化センター、中国芸術アカデミー、深圳メディアアートフェスティバルなどで展示。上海視覚芸術学院ロイ・アスコット・スタジオで講師もつとめた。科学の民主化、シビル・テクノロジー、クィア文化を探求する自律的コミュニティであるバイオアート台湾の創設メンバー。現在は、MIT メディアラボの主宰するグローバル・コミュニティ・バイオのフェローとして活躍している。

**Chun-Yuan Chen** : 台湾の国立成功大学でインダストリアル・デザインの学位を取得。その後、アメリカ合衆国ニューヨーク市のパースンズ・スクール・オブ・デザインで修士号を取得した。台北故宮博物院に勤務中は、双方向的アートインスタレーションにより鑑賞者が故宮博物院の収蔵品と身体的にインタラクトする作品に協力した。のち、ブルー・フェニックス・ニュー・メディア・アーツ (Blue Phoenix New Media Arts) におけるストラテジック・マネジャーとして、いくつかの双方向的インスタレーションの企画と設計に関わった。ドイツのデュッセルドルフにある台北デザインセンター・デュッセルドルフで三年間マネージング・ディレクターとして勤務し、台湾のデザイナーを、ヴィトラ・デザイン・ミュージアム、V&A デザイン・ミュージアム、デザイン・ミュージアム (ロンドン)、mudac (デザインと現代応用美術のミュージアム、ローザンヌ)、スワロフスキーなどの著名で国際的なデザイン団体や企業に紹介した。台湾の商業発展研究所 (Commerce Development Research Institute) でリサーチャーとして活動、テクノロジーがいかにしてコマーシャル産業を革新しているかなどのリサーチ・トピックにフォーカスしている。

SNS と文化創造・報告

2020年2月20日発行

科学研究費補助金基盤研究（A）

「脱マスメディア時代のポップ・カルチャー美学に関する基盤研究」

研究グループ

- ・室井尚（横浜国立大学教授・研究代表者）
- ・吉岡洋（京都大学教授・分担者）
- ・佐藤守弘（京都精華大学教授・分担者）
- ・吉田寛（東京大学・准教授・分担者）
- ・ファビアン・カルパントラ（横浜国立大学講師・分担者）
- ・秋庭史典（名古屋大学准教授・分担者）

